
魔法学校の中の刀使い

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学校の中の刀使い

【Nコード】

N9017V

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

夢宮学園は外界から隔離された絶海の孤島に存在している島を全て使用した魔法使い養成学校である。その島に住む生徒は全員魔法が使える、良き魔法使いとして社会に貢献できるよう日々鍛えられていた。その夢宮学園の生徒会長は御神楽圭一だが、彼には重大な欠点があった。それは御神楽に魔法という才能が乏しいことである。

夢宮学園の日常

「な、なんだ？ その刀は」

ありえない、と言った表情を浮かべる一人の生徒。

「別になんてことはない、通販で取り寄せた日本刀だが」

その生徒を睥睨する『風紀委員』の腕章をつけた生徒が疑問に対して淡々と答えた。

「くそっ！」

自棄になった生徒は手を振りかざした。

「一応忠告しておくが魔法を使用すると罰が重くなるぞ」

風紀委員の腕章を付けた生徒がそう警告した。

魔法というのは幻影の一種で、本来ならそこに実在しない物体があるように見せかける力の総称である。ただし、幻影といえども効果は侮れない。

『聖痕』の例があるように、強く思いこむことによって実際に肉体へ影響を及ぼし、さらに踏み込むと死のイメージを強く植え付けると本当に死んでしまう。

ゆえに、強すぎるイメージに関しては制約が課せられていた。

「炎よ、我の意思に従い、敵を殲滅せよ ファイアウォール」

炎系中級魔法 ファイアウォール。文字通り火柱を何個も召喚して壁を作り、それを相手へ襲い掛からせる魔法だ。

人が走る程度の速度とはいえ炎の壁が迫ってくる圧迫感は恐怖を伴う。だが、目の前の風紀委員は眉すら顰めずに。

「馬鹿が」

手に持った日本刀で炎の壁を切り裂いた。二つに分かれた炎の壁は先ほどの勢いを失い、五、六mほど進んだ地点で消失してしまっ

た。
「殺傷性が生じる可能性がある中級魔法以上は校則で禁止されている。本来ならその罰も加算されるが、今回はパニックによる出来事

として不問にしよう」

風紀委員長からの慈悲も生徒の耳には届いていないようだ。わなわなと唇を震わせて。

「け、経力による攻撃は魔法に影響を及ぼさせないはずだ」

「その通り、人体を強化させる経力は魔法による攻撃を防げない」

経力とは生命力を具現化させた力の一種である。意識しないと経力は垂れ流されているが、その経力を体内に留めることによって通常では考えられない力　十m以上跳躍したり一週間不眠不休で動き続けたりすることができる。

が、経力とはあくまで生命力。実態を持つ者が幽体を切れないようにイメージの産物である魔法に影響を及ぼすことができない。

「ま、魔法は物理的影響を与えられないはずだ」

「その通り、魔法は無生物に影響を与えられない」

魔法はあくまでイメージ。想像を膨らませる思考がない無機物に魔法の影響が出るはずもない。

「そうならば」

ここで生徒はゴクリと喉を鳴らす。

「一体その攻撃は何なんだ？」

その生徒がさす目線の先には、風紀委員が放った斬撃の痕がハッキリと廊下に残っていた。

その生徒は二つの意味を問いかけていた。

魔法による攻撃は魔法でしか防げない。

しかし、魔法による攻撃ならば無機物に痕を付けられるはずがない。

相反する矛盾が今、目の前で生じている事実とその生徒は混乱していた。

対する風紀委員はその質問に答えようとせず、めんどくさそうに。「知らなくていい。どうせ知ったところで何も変わらないから」
そう言い放った後、拳打ちを放って生徒を昏倒させた。

夕日が差し込む黄昏の時間帯に一人の少年が校舎内を歩いていた。その少年の左腕には『生徒会長』と銘打たれた腕章を装着していることから、夢宮学園の生徒会長だと言ったことが分かる。少年の名は御神楽圭一。中学生、下手すれば小学生と間違われかねない容姿と百六十cmに届かない小柄な体躯だが、れっきとした高校生であり、カオスを具現化したこの学園を束ねる生徒会長である。

「御神楽生徒会長！ 校則違反です！」
とくに当てもなくぶらぶらと校舎内を彷徨歩いていた御神楽は後ろを振り向く。

「校舎で武器の携帯はご法度ですよ。今すぐその刀を渡しなさい」
御神楽はお持ち帰りしたくなるような小動物の雰囲気を漂わせているが、たった一つの違和感 腰に下げた刃渡り六寸の日本刀が物々しい存在感を発揮して異様なコラボレーションを生み出していた。

日本刀の存在を指摘された御神楽は苦笑して。
「どうして僕が武器を携帯してはいけないのかな？」
と、聞いた。

御神楽の視線の先には普通の満点を叩き出してしまうその容姿と服装、爪は切りそろえられてスカートは膝上、ハイソックスを履いた眼鏡少女がいた。

「武器の携帯が許されるのは風紀委員だけです。残念ながら生徒会にご法度です」

御神楽の疑問に、いかにも規則を守っていますと言わんばかりの服装の少女が胸を張っている。

「ああ、確かにその通りだったね」

この学園は風紀委員に限って武器の携帯が許されている。
いや、正確に言うと武器を媒体とした魔法の使用を許可されていた。

御神楽達の通う学園は夢宮学園と呼ばれ、島一つ丸々敷地内とい

う広大な場所に建てられた魔法使い養成学校である。

「そうです、ですからその刀を預かります」

そう手を差し出してくる少女に御神楽は苦笑を深めて。

「君は一年だね」

と。

聞いた。

「その通りです。よく分かりましたね」

「特段驚くことじゃないよ。もし二、三年生なら絶対にそんなことを言わない、何故なら皆僕の所業を知っているからね」

「え？　どういうことですか？」

「去年はいろいろあったんだよ、だから僕は特例で武器の携帯を許可されている。疑うのなら風紀委員長なり教師になり聞いてみると良い」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9017v/>

魔法学校の中の刀使い

2011年8月31日03時13分発行